

恵泉 果物の文化史(6)

モモ

小林 幹夫(人間環境学科)

白い果皮に紅をさしたような美しい色、舌触りのいいソフトな果肉、したたるような甘い果汁。日本のモモは果物の芸術品といってもよい。

1. モモの種類と品種

モモは東洋で最も古い栽培の歴史を持つ果樹で、植物分類学上では、桃李科(Drupaceae)の桃李属(*Prunus* spp.)に属し、果樹園芸学上ではスモモ、アンズ、ウメなどを含めて核果類(Drupaceous fruit, Stone fruit)と呼ばれている。これは石のように硬い組織すなわち核(Stone)が果実の内部にあるからで、子房が肥大して果実となるときに、子房壁の内層が硬化してできたものである。ちなみに種子はこの内部に含まれている。

モモはサクラ科、モモ属に属し、一般には白肉種と黄肉種に大別されている。白肉種は生食と加工用に、黄肉種は主として加工用に仕向けられている。

白肉種は軟肉、多汁で溶性(melting)である。黄肉種は缶桃とも呼ばれ果肉は硬く不溶性(non-melting)でゴム質である。また、核と果肉の分離の難易により離核と粘核がある。

モモは、開花から成熟までの期間が短いほうの果物であり、成熟期ごろの天候に品質が大きく左右される。品種は熟期の早晩生により、早生種(開花後80日から95日で熟する)、中生種(100日から120日)、晩生種(130日から150日)の3群の品種に区別される。

モモの品種数は他の果物に比べても多く、早生種には布目早生、砂子早生、

岡山早生、大和早生、倉方早生、あかつき、錦(黄肉)などがある。中手種には白鳳、大久保、中山金桃、大和白桃、中津白桃、缶桃5号(黄肉)、晩生種には白桃、清美、上海水密、缶桃12号(黄肉)などがある。

ネクタリンは、有毛品種から突然変異によって生じた細毛のない変種である。明治時代以前にも、北陸や東北地方で栽培されており、無毛のモモの価値がこの当時から認められていたと考えられる。現在の栽培品種は欧米からの導入品種を改良したもので、黄肉種と白肉種がある。品種数は少なく、興津、ネクタレッド、水野などが主なものである。

モモ・ネクタリンの産地は山梨、福島、長野、山形、岡山、和歌山などの各県で全体の90パーセントを占めている。

2. モモは中国原産

中国では古来、「五穀」と同じように、「五果」と呼ばれる重要な果物がある。「五穀」は、一般には、イネ、キビ、タカキビ(モロコシ)、ムギ、マメとされている。「五果」は、モモ、スモモ、アンズ、ナツメ、クリ、の五つを指すとされている。

モモはスモモとともに古くより中国で栽培され、バラ科の中では最も重要な果樹のひとつである。『礼記』以来、両者は「桃李」と併称され、食用のほか、観賞用としても親しまれ、中国人の生活にとってかかわりの深い果物であった。

3. モモにまつわる神話、民話

中国では昔からモモに魔力があって、鬼やシコメ(魔物)を制したり、病魔を退治したり、霊果、神果、仙果と信じられていた。

モモの威力は人間にも乗り移り、モモから生まれた桃太郎、モモを食べて不老不死の神仙になった西王母、モモと孫悟空、モモと陶淵明の桃源郷など、モモにまつわる神話、民話は、日本にも中国にも数多くある。

①神の名を賜ったモモ

『古事記』には「イザナギノ命(ミコト)は、亡くなったその妻イザナミノ命(ミコト)に会いたいと思って、黄泉の国に追って行った。しかし、イザナミノ命の体にはウジがわき、八つの恐ろしい雷神が生まれていた。イザナギノ命は妻の体を見て驚いて逃げ帰ったが、妻は黄泉のシコメ(魔物)に夫を追いか

けさせた。イザナギノ命は逃げる途中のあの世とこの世の境である坂の下まで来て、そこに成っていたモモの実三個をとって投げたところ、その威力でシコメは逃げ帰った。イザナギノ命はモモに感謝してモモにオホカムズミノ命の称号を与えた」とある。

②西王母のモモ

『本草綱目』に「桃は西方の木にして五木の精、かつ仙木なり」とあるように、モモは延命吉祥のシンボルとされていた。モモの仙木を伝える物語は多くあるが、なかでも有名なのは西王母のモモの話である。

西王母は西方の国の女神といわれ、アラビアの女王シバであるとも言われた神秘的な女王である、あるとき、漢の武帝が不老長寿を願っていると聞いて、7月7日に天から下り武帝に会った。西王母は携えてきた7個のモモのうち2個を自分で食べ、残り5個を武帝に献上した。武帝は不老長寿の仙果である5個のモモを平らげたあと、そのタネを王宮の庭園に播いた。それを見ていた西王母は大いに笑って、「その天上のモモは三千年に一度花が咲き実をつけるので、下界にタネを播いても、次に食べられるのは武帝の死んだ後のことだから、タネを播くのは無駄な行いだと言った。」とある。

③孫悟空とモモ

おなじみ『西遊記』の孫悟空。花果山の岩から生まれ地上界で大暴れしていた孫悟空を、天帝は法力によって鎮圧、天界でおとなしくさせておくため、モモ園(蟠桃園)の管理をさせた。

モモ園には3600本のモモの木があり、1200本ずつ3区画に別れていた。

第1区の1200本は3000年に1度花が咲いて実をつける。この実を食べると仙人になり、身が軽くなる。

第2区の1200本は6000年に1度花が咲いて実をつける。この実を食べると不老不死となり霞や雲に乗り空を飛ぶことができる。

第3区の1200本は9000年に1度花が咲き実を着ける。この実を食べると天地神明と年齢を同じくする。つまり天壤無窮の神格を得ることができる。

孫悟空は蟠桃園の番人を命じられたが、モモを盗んだために天界を追放された。その代わり、不老不死の能力を得、その後、玄奘三蔵の伴をして、困難をしのいで天竺に入り、三蔵法師をして5048巻の経文を得させたという。

④花嫁とモモ

日本では昔、花嫁がモモのタネを持って嫁入りする風習が各地にあった。この風習は地域によっては近年まで残り、今でも「おばあさんが嫁入りのときに持ってきて植えた」というモモの木が見られる。この風習もまた、モモを結婚や安産のめでたい仙果とする中国の風習や伝説とかかわりのあるものと思われる。これによってモモは全国に広がったといわれる。

4. 栽培の歴史は6000年以上

1960年に中国の江蘇省の呉江県で発掘された青崗文化（新石器時代）の遺跡中に、核果類の果実の核が発見された。このことは5000～6000年以前に人類がすでに核果類の果実を採集または栽培して利用していたことを示している。

中国における果樹栽培の歴史を記した最初の文献『詩経』（周代、紀元前11～前6世紀）のなかに「園にはモモがあり、その実を食う」とあることから、モモ栽培の歴史は少なくとも『詩経』の編著時（周代）以前ということになる。この点についてド・カンドル（1883）は、モモの栽培年数を4000年以上と記しており、青崗文化（新石器時代）の遺跡からの核の出土を参考にしてもモモの栽培の歴史を、ハシバミ、クリ、ナツメ、スモモ、アンズ、ウメなどとともに、6000年以上であると記している。したがって、モモは中国では果物の代表語に用いられ、たとえば桜桃（オウトウ）、胡桃（クルミ）、蒲桃（葡萄、ブドウ）、扁桃（アーモンド）のとおりである。このことは、リンゴ（apple）が西洋で果物の代表語に用いられたのと似ている。

5. 中国からシルクロード経由で西へ伝播

中国で発生したモモは毛毛（もも）といわれたように、果皮には産毛がいっぱい生え、桃太郎のモモで知られる天津水蜜桃のように頂部が突起し、果肉の色は白、赤、黄が混ざって、肉質は硬かった。

中国からシルクロードを経て西域に至り、さらに西進してペルシャで発展した。ついで古代オリエント一帯に普及し、一部はアレキサンダー大王の遠征の土産としてギリシャからローマに伝わり、やがて地中海沿岸諸国にも伝播した。17世紀にはアメリカ大陸にまで伝わった。

6. 弥生の人々にも好まれたフルーツ

現在わたしたちが食べているモモの品種は、明治時代初頭に中国から導入された大果系の品種から作出されたものである。

わが国の在来のモモの歴史は古く、弥生時代前期のいくつかの遺跡から、モモ核が発掘されている。弥生時代後期および古墳時代に進むほど、モモ核の出土頻度は高くなっている。これらのことから、モモは縄文時代末期から弥生時代前・中期にかけて、稲作農耕文化とともに中国大陆・朝鮮半島から導入されたと考えられている。

弥生時代におけるモモ核の出土数は他の果実類(ウリ類、スモモなど)を大きく引き離し、イネ、ドングリに次ぐものとなっており、その栽培および利用頻度の高さが推測できる。加えて弥生時代後期の遺跡からは、大型のモモ核が見つけられていることは、栽培技術においても一定の進展があったことを思わせる。

文献としては、宝亀二年(771)の『東大寺文書』に、東大寺が設置した布施屋に、クリ、ナシとともにモモが植えられたとある。また、『正倉院文書』の天平十一年(739)の『写経司解』からは、平城京では、モモの栽培とともに、商品としての流通もあったことがうかがい知れる。当時のモモは25から70gとあることから、現在のウメの大きさに相当する。

『延喜式』には、宮廷付属の園地にカキやナシとともに、モモが100本植えつけられていたとある。また、『諸国貢進雑薬』としてモモ仁(核中の種子を乾燥させたもので、鎮咳効果あり)があげられている。貢進国が40カ国にも及んでいることから、モモの栽培の広がりとともに、宮中の生活におけるモモ仁の薬としての重要度が推測される。

7. 水菓子になったのは平安末期

平安朝の末期から鎌倉時代には日常生活での重要な菓子のひとつになっていた。しかし、果樹としての栽培記録は江戸時代になってから見られるだけで、当時の品種はいずれも小型で果肉の硬いものであった。

日本のモモは神話や物語では大きく扱われてきたが、食用としての需要は少なく、品種構成もモモの花を観賞する『花モモ』が主体だった。『桃の節句』に供える花モモは、江戸時代には200種以上が栽培されていたとされる。

18世紀はじめの『和漢三才図会』では、産地として『山城伏見、備前岡山、備後、紀州』が上げられている。18世紀中期に作られた諸藩の『産物帳』によれば、モモの品種数はカキ、ナシに次ぎ、特に陸奥国と尾張国に多く、江戸時代中期にはモモ栽培は全国的になったと言われている。

8. 外国品種の導入から現代のモモへ

明治時代はじめに欧米および中国から多くの優良品種が輸入された。上海水蜜桃、天津水蜜桃、蟠桃の3系統が東洋系で、アムスデン・ジューン、アーリー・クロフォード、アドミラル・デウイ、ブリッグ・メイなどは欧州系である。この中で特に、中国の上海水蜜桃と天津水蜜桃は栽培者の注目を集めたが、わが国の気候風土での栽培上の不適應性が明らかとなり、普及しなかった。しかし、その後栽培上の問題点を解明しつつ、これらの中国品種の偶発実生のなかから、日本の気候風土に適したいくつかの栽培品種を作出することに成功した。岡山県の「白桃」と「大久保」、神奈川県「橘早生」などがある。「大久保」は1899年、「白桃」は大正末期に、いずれも岡山県の大久保重五郎氏により発見されている。

100年ほど前に、民間育種家により発見、育成されたこの2品種が、現在もなお主要な品種として栽培されていることは驚くべきことではないだろうか。

参考文献

1. 天野秀二、臼井直子、丹羽秀子(1965)
果物天国—フルーツライフの楽しみ:81-86. テイビーエス・ブリタニカ
2. 今井敬潤(2006)くだもの・やさいの博物誌:56-63. 文理閣
3. 小林 章(1990)文化と果物:69-78. 養賢堂
4. 星川清親(1978)栽培植物の起源と伝播:216-217. 二宮書店
5. 岸本 修ら(1993)くだものと環境:179-180. 古今書院
6. 梅谷献二ら(1994)果物はどうして創られたか:160-163, 21-24. 筑摩書房
7. 間苧谷 徹(2005)果樹園芸博物誌:23-28. 養賢堂
8. 間苧谷 徹ら(2000)果実の真実:92-93,164-166. 化学工業日報社